

五十年代後半には、パンだけでなくカップ麺も販売され、生徒には好評であったという。岳南堂のほかに学校の東側には、生徒たちが通称で「おぼさんち」と呼んでいた店もあり、主に運動班の生徒が足しげく出入りしていたという。岳南堂も「おぼさんち」もツケが効いたので、生徒たちは利用しやすかったようである。

野沢本町の長野県信用組合野沢支店の斜向かいにあった葦屋パン店（現在は葦屋書店の斜向かいに移転して営業中）のパンも生徒には人気があった。かつては学校にも出張販売に来ていた。やや堅めの生地のコッペパンに注文に応じてクリームやジャム、あんこなどを挟み込んでくれるのは、現在も変わってはいない。

学校から野沢本町の交差点に向かう途中には紀代美食堂があった。これも生徒が行きつけの店で、班活動で下校が遅くなったときなどによく利用された。生徒たちが注文するのはもともと安価なラーメンであることが多かった。先生方が勤めの帰りに一杯飲んでいる場に出くわし、「早く帰れよ。」などと声をかけられることもあった。残念ながら紀代美食堂もすでに営業をしていない。

現在の生徒たちもほとんどの者が弁当を持参して昼食に食べている。弁当を持ってこない生徒は塩川ベーカーが昼休みに出張販売するパンを購入して食べている。しかし、岳南堂はすでに営業しておらず、近くにはコンビニエンスストアもあるが、学校が生徒の校外への不要な外出を認めていないため、外で食事をする生徒はいない。さらに昨今では、新型コロナウイルスの感染防止対策として対面での食事はしないように指導され、黙食が推奨されているため、かつてのように仲間と談笑しながらにぎやかに食事を楽しむという雰囲気は失われている。

### 喫茶店文化とその衰退

かつて野沢には「白樺」、中込には「ぼけっと」・「明正堂」といった喫茶店があった。このうち、「明正堂」は

明るくて垢抜けた雰囲気の店で、野沢北高生はそれほど多くは利用してはなかつたようであるが、「白樺」や「ぼけっと」には一般客に混じって、北高生をはじめとする多くの高校生が出入りしていた。

新海節生（七三回卒）・白石克典（七五回卒）らの回想によると、在学当時、「白樺」と「ぼけっと」は北高生の間で人気を二分しており、「白樺」派と「ぼけっと」派にはっきり分かれていたという。

「ぼけっと」はすでに閉店しているが、「白樺」は二〇〇六（平成一八）年に、もともとあった場所（野沢本町の現在の長野県信用組合野沢支店横）から新店舗（現在の西澤書店横）に移転し、現在も内田直子さんが営業されている。以下に、数頁を割き、内田直子さんや同窓生からの聞きとりをもとに、当時「白樺」に集った生徒たちの様子を記すこととする。彼らと「白樺」との関わりこそが、かつての野沢北高生たちの精神のあり方の一例を典型的に体现していると思われるからである。

純喫茶「白樺」は一九七四（昭和四九）年に内田<sup>みちこ</sup>直子さんが創業し、娘さんの直子さんと営業されていた。創業当時はわずか十五席しかなかったが、現在の新店舗は二十五席に増え、店内も広くなっている。直子<sup>みちこ</sup>さんは一九三七（昭和一二）年に河上肇門下の内田丈夫氏と結婚され、同時に丈夫氏の満鉄調査部奉天支社赴任のため、中国東北部（旧満州）に渡られた。現地での生活にも慣れ、平穏な日々を送っていたところ、突如一九四四（昭和一九）年に丈夫氏が横浜事件（注）に関与した容疑で拘束されたため、三人のお子様を抱えて中国に留まり、一九四六（昭和二一）年によく帰国されるなど、大変なご苦労をされた方である。戦争体験の語り部としても活躍され、ご自身の戦争体験を記した著作『遙かなる山河』により一九八七（昭和六二）年に佐久文化賞を受賞



写真6 移転前の白樺  
（昭和60年頃撮影）  
／内田直子さん提供

され、翌一九八八（昭和六三）年には『遙かなる山河』『アカシアの丘に』の両著により日本文芸大賞女流文学功労賞を受賞された。

（注）横浜事件：一九四二年から四五年にかけて、編集者・新聞記者ら約六十余名が治安維持法違反で逮捕された戦時下最大の言論・思想弾圧事件。戦後、再審請求がされ、二〇〇五年に再審が開始。二〇〇九（平成二一）年、罪の有無を判断せず裁判を打ち切る免訴処分となった。

創業以来、多くの北高生が「白樺」に立ち寄り、親や教師に言えない本音を語り合ったり、悩みを相談する場となっていた。迪子<sup>みちこ</sup>さんは生徒からは「お母さん」と呼ばれ、慕われていた。「白樺」の居心地の良さは、迪子<sup>みちこ</sup>さんの包容力のあるご人徳によるところが大きいと思われる。また、直子さんは生徒たちにとってはちょっと年上のお姉さんのような存在で、時には生徒にきびしくもあり、また友だちのような存在であった。男子生徒にとっては大人の女性として憧れの的であったのではないだろうか。

店内には自由に書きこむことのできる「親しき人々の群れ」とよばれるノートがあり、生徒たちはそのノートに、日常のたわいもない出来事だけでなく、進学や恋愛の悩みや学校や政治・社会への不満など、様々な思いを若々しい感覚で書きこんだ。このノートは長年にわたって書きつがれ、三十四冊にもおよんでいる。その内容は、一九九一（平成三）年に『ぼくらの青春解放区』珈琲色のハイスクール日記』と題して郷土出版社から発行された。この本の帯の裏には、直子さんの依頼により脚本家の山田太一氏が、「ここには、いわば高校時代の原材料がある。幼さも賢さも弱さも粋がりも鋭さも甘えも、他ならぬいま高校時代を生きている人たちが書きとどめていることが、読む者を打つのであ



写真7 『ぼくらの青春解放区』と『白樺と私』

る」と、紹介の言葉を寄せてくださっている。まさに的を射た言葉で、この本に記されている内容は、そのまま当時の野沢北高生の心の声といえる。

この本を読んで感じられるのは、当時の生徒たちの旺盛な知識欲と豊かな感受性、自我を確立しようとしてもがく若者の姿である。以下に、この本に掲載されている当時の野沢北高生の言葉をいくつか紹介する。いくらか無理して背伸びをした表現もみられるが、それを差しひいても、はたして現在の野沢北高生にこれだけの精神性の高さはみられるだろうか。

YはハイデッガーやS・フロイトを読んでいるようだが、誤解している。そういう一人前のことは、日本教文社の『フロイト選集』十七巻を読み切ってから言え。だいたいフロイトは恋だの愛だのについては何も言っていない。そういうことを語りたい奴には、宮城音弥『愛と憎しみ』（岩波書店）をおすすめする。

お母さんに、なぜ俺やHは社会を批判するようなことを書くのかと質問された。難しい質問だ。ただ、俺は 自分なりの意見を持っていたいと思う。一部の人間の言いなりになって動かされるような「国民」にはなりたくない。まだまだ知らないことも多いし、自分の思想も固まっていないが、今はもっと社会の矛盾を掘り下げて考えてみたい。いろいろ見て、考えて、生きていきたい。

丸くなっちゃあだめだよ！俺たちまだ若いんだよ。角ばってなきや。

二〇二二（令和四）年現在、五十歳から六十歳代となっている当時の生徒たちのなかには、「自主休講」と称して「白樺」に出入りをしていたものが多かった。高校生としての立場をわきままえながらも、時には料がって紫煙をくゆらせ、仲間たちとおおいに語りあう光景もみられたようである。今では熟年世代となった彼らは、「そんな時を過ごすことにある種のステータスを感じていた」と当時を述懐している。たしかに、やっていたことはけ

って褒められることではないが、それぞれが青年期特有の悩みに葛藤しながらも、心を許した仲間とともに真摯に自分の生き方を模索したり、お互いに共感しあったりする姿がうかがえる。まさに「白樺」は、この本の題名にあるように、「青春解放区」<sup>カルチエラン</sup>であり、学校外における野沢北高生の文化的サロンといえる場であった。

生徒たちが卒業したあとも、一九八七（昭和六二）年に迪子さん・直子さんを慕う卒業生によりファンクラブともいえる「白樺会」が結成されるなど、「白樺」とかつての常連客であった卒業生の交流は今日までつづいている。二〇〇六（平成一八）年の道路整備計画にともなう店舗移転の際には、店の存続を熱望する「白樺会」の面々が資金をカンパしたり店舗の設計・建築を請けおうなどとして、現在の場所への移転が実現した。

迪子さん<sup>みちこ</sup>は二〇〇八（平成二〇）年に逝去されたが、その後も「白樺」は娘の直子さんに引きつがれ、かつての常連客も現在にいたるまで頻繁に店を訪れている。創業四十周年にあたる二〇一四（平成二六）年には、白樺会の有志により『白樺と私』と題する小冊子も刊行された。半世紀近くにもわたってこのような濃密な関係がつづいているのは、全国でも希有ではないかと思われる。

このように、「白樺」は当時の北高生に多大な精神的影響を与えてきたが、地域における文化の発信基地として果たしてきた役割も見逃せない。一九九一（平成三）年一月の白樺会新年会には佐久総合病院院長の若月俊一氏をお招きして講演をいただき、それ以降も白樺会が主催した二〇一一（平成二三）年の「白樺移転五周年記念講演会」には元上野動物園園長の中川志郎氏、二〇一六（平成二八）年の「白樺新店舗十周年記念講演会」には医学博士佐藤泰三氏が、それぞれ講演をしてくださった。

また、「お母さん」こと内田迪子<sup>みちこ</sup>さんが日本文芸大賞女流文学功労賞を受賞された際に、同時に受賞されたのが脚本家・作家の山田太一氏で、その縁もあり、『ぼくらの青春解放区』出版の際には巻末の文章を寄せていた

だくなど、直子さんと山田氏とは現在にいたるまで交流がつづいてい  
る。山田氏はかねてから、「一度白樺という舞台をのぞいてみたい」  
と大変関心を寄せられ、二〇一四（平成二六）年九月に「開店四十周  
年を祝う会」が開催されたさいに出席され、その後、会の成功を祝い、  
慰勞する丁寧な葉書を直子さん宛にくださっている。

一九九三（平成五）年には、直子さんを中心に北高の卒業生たちで「白

樺俳句会」を発足させた。幹事は北野建設勤務の林千浩（七七回卒）で、その他に山梨大学医学部教授の小泉修

一（七八回卒）や野沢南高校教諭の青木志麻（八六回卒）など、会員は最盛期で二十四人を数えた。二〇〇二（平成

一四）年には合同句集『白樺』を発刊し、二〇一八（平成三〇）年には、長年の指導を感謝し、現代俳句協会関西

副会長の尾崎青磁氏を招いて、発足二十五周年を先生とともに祝った。

自動販売機の普及やコンビニエンスストア・ファストフード店の増加により、手軽に喉を潤すことができるよ  
うになり、現在の高校生はほとんど喫茶店を利用しなくなった。喫茶店にたむろしてさまざまなことについて議  
論したり、他愛もない会話を楽しんだりしながら時間を潰すという生活スタイルも、今ではほとんどなくなった。  
直子さんによると、一九九六（平成八）・一九九七（平成九）年ころから北高生をはじめ、高校生の来店は減り、  
今ではほとんど卒業生ばかりだという。

そもそも、今の高校生は自他の距離感の取り方に気を遣い、常にその場の空気を読むことに神経を使う傾向が  
ある。相手の意見を露骨に批判することはもちろん、自分の考えを強く主張することにもきわめて慎重で、その  
ことよって相手の心象を書して良好な関係が崩れ、自分が孤立することを何よりも恐れている。また、スマー

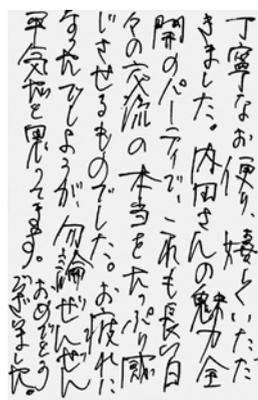


写真 8 山田太一氏からの葉書

トフォンの普及により、対面で直接に語りあう機会も減っている。メールやライン上での「お友だち」の多さを誇ることはあっても、その相手との関係は薄く、濃密な内容の議論をすることは避け、軽い「ノリ」でのやり取りに留まることが多い。かつての喫茶店文化というべきものが衰退しつつある一つの要因として、こうした社会の変化やそれによる若者の気質の変化があるのではないかと思われる。

### 映画文化の変化

かつて、野沢北高生の通学区内にもいくつもの映画館があった。また映画産業が盛んであった一九五九（昭和三四）年の時点では、佐久市内では野沢演芸館・中込座・ロマンス座の三館、小諸市内では小諸中映・小諸キネマの二館があり、それに佐久町栄キネマと望月町の川西座を加えて、佐久地区には七館の映画館があった。これらの映画館では、のちには成人向けの作品も上映されたが、国内外の一流の監督や俳優による質の高い映画も数多く上映され、野沢北高生もよく出入りして鑑賞した。

こうした映画により、生徒たちは欧米の民主的・自由主義的な風潮や豊かな生活に憧れたり、内外の文学作品を映画を通じて理解した。映画が生徒の精神面に与えた文化的な影響はきわめて大きいといえる。校内でも映画同好会が結成され、映画についての評論を論ずるだけでなく、自主映画の制作にまで取りくんだ。

しかし、一九七五（昭和五〇）年に中込座が焼失して閉館し、続いて映画産業の斜陽化により一九八〇年代の後半には野沢演芸館・ロマンス座も閉館となった。また、その頃からレンタルビデオが普及し、映画は家庭で手軽に鑑賞できるようになった。生徒たちも、重厚な大作よりも気楽に楽しめるエンターテイメント性の強い作品を好むようになり、やがて『となりのトトロ』（一九八八年公開）を皮切りに日本の良質なアニメ映画が封切られ